

客席から見た舞台監督の仕事

演劇評論家 茨木 憲

つい近年刊行された「演劇論講座」(全6巻・補巻1)という叢書の中に、「舞台監督」という項目のないことに、実は、この小文を書くに際して当たってみて、はじめて気がついた。第三巻「演出・演劇各論」の中に、当然あると思っていたのが、ない。それでは補巻「演劇各論・用語辞典」のなかにあるだろうと探すと、「各論」のなかにはなくて、「用語辞典」のなかに、やっと、「舞台監督・演出家から演出プランを受取って、稽古の進行状態を監督し、初日以降は、演出プランの実現に向けて舞台全体の進行を指揮監督する係。ただ、その人の力量によって役割も流動的である。」とだけ、しるされていた。

この叢書のなかでは、ぼくも一章を受け持って書いているので言い難いのだが、最新を誇る「演劇論講座」のなかに「舞台監督」についての項目のないことに、舞台監督協会としては、抗議して追加させてよかったことと思う。千田是也さんの「演劇とは何か」の章のなかにも「俳優の仕事」<作者の仕事>という項はあるが、<舞台監督の仕事>には触れられていない。

ことほどさように、舞台監督の仕事は軽視されている。または無視されているのが、甚だ残念ながら、こんにちの実情なのである。

私たち観客のがわからなくても、いま観た舞台のなかから、舞台監督の存在を実感することは殆どないといつてよいだろう。

演出家は、俳優のなかに姿を消すべきだ、とは、よく言われる。演出家の手ぎわが、ぎらぎらしている舞台は、十全なものではないというのである。しかし、俳優のなかに全く姿を没していたときでも、私たち観客は、その舞台から演出家の意図を探しだして、かれこれ考えることがある。また、その戯曲のなかには一言も自分を語ろうとしない劇作家の姿勢をも、舞台のなかから掘り出してきて問題にすることもある。

しかし、舞台監督の仕事は、演出家の場合以上に、舞台ぜんたいのなかに、全くその姿を隠しているの、その存在が観客に知られることのないのは、やむを得ないことであるのだろう。

それでは、あってもなくてもよい仕事かといえば、それは全く、そうではない。

ぼくは、しばしば「演出家の仕事のひとつは、第一の観客であることだ」と規定する。演ずる俳優と。観る観客とがあって、はじめて存在し得る演劇なのだから、その「第一の観客」の立場で、稽古場での創造の仕事が運ばれるということだ。

それに対して舞台監督の仕事は、「第一の観客から最後の観客まで」の立場で、貫通しておこなわれるのだと思う。長期にわたる公演の場合には、なおさらに、この仕事の重みは加わるのである。私どもは、大概公演初日に観ることが多いのだが、ある期間の後に再見したときに舞台がぐっとよくなっていることがある。途中で演出家が稽古を絞めなおしたという場合もあるが、優れた舞台監督の磁力がはたらいたのだな、と思わせられることもあるのだ。そんな風にしか、舞台監督の存在は、観客には知られない。一舞台監督の存在を強制的に観客に確認させるような、超前衛的(?)な舞台がつくられるまでは、多分、そうだろう。